「原爆の夜の思い出」

溝西　護（当時 13 歳）

被爆当時、私は広島県立第二中学校二年生であった。真夏の太陽がかんかん照りつける、しかも夏休みというのに毎日のように勤労奉仕と称して、家屋疎開の作業や兵器廠・被服廠の作業にかり出されていた。

八月五日までは、今の百メートル道路にあたる三川町あたりで家屋疎開のため、家に綱をかけて引き倒す作業をしていたが、八月六日は元の東練兵場、今の光町鉄道管理局の東側あたりで、練兵場を耕して芋畑にしてあったその畑の草取りに、同学年六クラス約三百人が参加していた。

西条を汽車で出て八時頃広島駅に着き、歩いて作業現場に着いた。間もなく引率の先生の合図で集合しようとしているとき、鋭い閃光を浴びたのである。私は山陽本線で通学していた級友と三人（一名は死亡）で、上衣を取るためボタンをはずしながら集合場所に向っていると「B29 が三機編隊で東の空からやってくる」と誰かが言ったのを聞いた。空を見上げると、三機が悠然と西に向かっているのが見えた。やがてそれが北へ方向転換をした。そしてその航跡にパラシュートが見えた。その瞬間、真黄色の光がテーンという鋭い響きとともに頭上や周囲を覆った。一瞬茫然として立ちすくんだが、しまった！ やられた！ と思い、あわててから訓練していた通り、両手で両方の目と耳を覆い地面に伏せた。この動作は後で考えるとすべて無意味なものであった。

地面に伏していて、やがて押さえていた手の隙間から周辺を見ると、真黄色の情景はやがて灰色に変って、丁度灰を撒き散らしたような情況になった。覆っていた手を耳・目から離すと、すでに二葉山の麓では何かが爆発して引火したのであろう、火の手が上がっていたのを今でも覚えている。その時友人の一人が「左頬が痛い」と言い出した。見ると左頬の皮膚が剥離して垂れ下がっていた。「頬の皮膚がはげているぞ」と言うと「君もはげている」と言った。それから一分～二分と経つ内に、丁度火傷のあとと同じように、ずきんずきんと左の頬と手の甲、胸の一部が痛みはじめた。

同級生約三百人は、被爆のショックで我を忘れ周辺に散っていった。私たち三人も、一歩でも自宅（西条）に近い方向に避難しようとして広島駅に近づいたが、なにせ痛みが激しく、居ても立ってもおれなかった。そこで駅裏の国鉄構内にあった水道栓（水はやがて出なくなった）を開けて、よごれたタオルに水を一杯浸み込ませて、火傷部分にあてて冷やした。しかし、その瞬間は痛みはとれても、すぐにまたずきんずきんと痛み出した。何度タオルを替えてやっても同じであった。仕方なく痛いのをこらえて、広島駅から線路づたいに帰ることにした。すると同じように被爆して皮膚の垂れ下がった人、水泡が全身に出ている軍人、切

り傷を負った人の群衆が、線路づたいに東へ東へと避難していた。
　向洋駅近くまで帰って。民家の軒先で休ませてもらった。その時その家のおばさんが、青崎の小学校が救急場所になっていると教えてくれた。早速青崎小学校に行くと、応急手当として火傷部分に食用油を塗ってくれた。そうすると痛みはとれた。しかし、そこには大勢の被災者が詰めかけており、その中に、全身を火傷し水泡になって「助けて！」「お母さん！」と悲鳴をあげていた女子学生の姿は、今でも忘れることはできない。
　応急手当を受けて、友人三人とまた帰路についた。三人で海田駅で何時くるとも知れない汽車を待って帰ることにした。歩き疲れて三時頃まで駅構内で食事もせずに待った。ようやく乗った汽車には、片足を建物の倒壊ではさまれ骨折した人、全身火傷の軍人等、多くの重傷を負った人が通路に横たわっていた。
　その時行動を共にした友人の一人は間もなく死亡し、他の一人とは昭和三十八年まで会うことはなかった。十八年目、偶然Ｋ高校に転任して行った時、その友人もそこの先生をしているのに出会い、当時の思い出を語ったのである。しかもその学校の校庭の一隅に、被爆して広島から歩いて帰る途中、民家で休ませてもらった時、広島の空を覆っていたきのこ雲を背景に、真紅の花をつけた「さるすべり」（その花を原爆の花という人もいる）の木と同じものが植えてあるのを見て、奇しくも当時を思い出さずにはおれなかった。